

# パーソン・センタード・アプローチにおける「出 会いの関係」から考えるプレゼンス：Schmidの論 文から学ぶ？

著者	山根 倫也, 並木 崇浩, 白? 愛里, 小野 真由子
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	12
ページ	105-115
発行年	2021-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00022938">http://doi.org/10.32286/00022938</a>

特集：パーソン・センタード・セラピーの展開

## パーソン・センタード・アプローチにおける 「出会いの関係」から考えるプレゼンス

— Schmid の論文から学ぶIV —

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 山根 倫也  
関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 並木 崇浩  
関西大学心理臨床センター 白崎 愛里  
関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 小野真由子

### 要約

本稿は、他者との出会いの関係における接触と知覚という観点からプレゼンスについて論じた Schmid (2002) の “Presence: Im-media-te co-experiencing and co-responding. Phenomenological, dialogical and ethical perspectives on contact and perception in person-centred therapy and beyond. を要約し、考察を加えたものである。Schmid が主張するプレゼンスとは、現在その瞬間において他者を「ひと」として知覚し、また自分自身も「ひと」として存在することである。このことは、本物であること (Authenticity)、承認 (Acknowledgment)、理解 (Comprehension) という中核3条件の現象学的な記述により詳細に説明されている。Cl-Th 関係において、Th のプレゼンスを Cl が知覚することにより、Cl はより促進され、Th との相互関係が可能になる。プレゼンスに基づいたこのような関係は、パーソナルな出会いの関係と呼ばれている。また、Cl との最初の出会いがパーソナルな出会いの関係に発展する過程における内省の重要性が指摘されている。その場の体験を内省することが、新たな影響を与える体験につながるのである。そして Cl-Th 関係の中で、Cl と Th はますます共同体験、共同内省するようになる。末尾では、パーソン・センタードの Th には、「私」という自己の在り方そのものが問われることを指摘し、プレゼンスが流動的な「私」という自己の在り方という観点から捉え直される可能性について言及されている。

キーワード：プレゼンス、接触と知覚、出会い、関係性、PCA

### 1. はじめに

Carl Rogers が晩年にパーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach, 以下 PCA) における関係の性質に関する「もうひとつの特徴」として述べたプレゼンス (Presence) (1986/2001) は、Rogers 自身による言及が限られていることもあり、その受け取り方は PCA

の臨床家の間でも様々である。例えば、プレゼンスとは神秘的でスピリチュアルな次元のものであると捉えられる (Thorne, 1994/2000) こともあれば、セラピスト (Therapist, 以下 Th) に必要な第4の態度条件 (Thorne 1992/2003) として考えられることもある。他にも、プレゼンスとはクライアント (Client, 以下 Cl) の実現傾向に対する信頼とカウンセラーの3つの態

度条件を提供することに心血を注ぐ結果であり、いわゆるカウンセラーの3つの態度条件に先立つべき第1の態度条件(岡村・保坂, 2004)と表現されることもあれば、パーソン・センタード・セラピー(Person-Centered Therapy, 以下PCT)の中核として、関係性がThとClで共に創られるものという点を強調するために取り上げられることもある(Sandrs, 2004/2007)。このように、プレゼンスは一貫した理解が定着しておらず、PCAの理論の中でも検討の余地が多く残されている概念の1つである。

本稿は、“Rogers’ Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 4: Contact and Perception (2002)”に掲載された、Schmidの“Presence: Im-media-te co-experiencing and co-responding. Phenomenological, dialogical and ethical perspectives on contact and perception in person-centred therapy and beyond.”を要約し、考察を加えるものである。PCAの中でも対話的アプローチの立場をとるSchmidの論は、Rogers(1957)の第1条件である心理的な接触(または関係)と第6条件である知覚からClとThの出会いにおける中核3条件とプレゼンスの在り方について論じている点が興味深い。このSchmidの論から、スピリチュアルな次元または第4条件ではなく、関係の前提としてのプレゼンスという概念の検討を試みる。

## 2. Presence: Im-media-te co-experiencing and co-responding. Phenomenological, dialogical and ethical perspectives on contact and perception in person-centred therapy and beyond. (2002)の要約

この巻は、前巻までに述べた中核3条件の前提を扱っている。関係と知覚がなければ、他の条件は意味を成さない。この章では、まず対話的な立場から接触(あるいは関係)と知覚が何を意味するのか明らかにする。次に、PCTにお

けるそれらの意義をTh側とCl側の双方から検討し、セラピーの過程においてそれらがどのように発展するのか、またどこを目指しているのかについて明らかにする。

### I. カイロス—現在の瞬間の豊かな潜在能力

「カイロス」はギリシャ語で「時間の質」という意味であり、人の実存的な時間、主観的な時間を表している。カイロロジカルな思考とは「瞬間を生きる」こと、つまりカイロスを把握し、実存的な意味を見出そうとすることだ。PCTは、まさにカイロロジカルなセラピーである。それは現在を単なる過去として理解し、人生を幼少期に得られたパターンの再現と見なしている伝統的な精神力学的理解や、行動療法で見られるような歴史的思考とは正反対の立場である。パーソン・センタードの理解は、現在その瞬間を、人の素質をさらに実現するための豊かな希望として体験することに根ざしているのだ。

また、PCTは「関係または出会い(Rogers, 1962)」のセラピーだと理解されている。「心理療法における瞬間瞬間の出会い(Rogers, 1980)」は即時その現在において起きており、この概念が「プレゼンス」という実存的な態度に対応している。これから、このような関係の特徴、その前提条件、またその発展を現象学的、対話的、倫理的観点から探索し説明を試みる。

### II. 接触と知覚から

関係は黎明からPCTの中心的なカテゴリーである

1957年に発表されたRogersの基本的な主張は、ひととして人間の在り方の本質に、個人と関係という2つの次元があることを暗示している。「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」における最初の条件は、ThとClが「心理的な接触」をもっていなければならないという人間相互の関係に対応しており、他の5つの条件は、そのような関係の特徴を定義しているのだ。これらの条件はすべて、

ある種の関係が提供されていれば、ひとは自身の資源に基づいて建設的な方法で発展する可能性と傾向を持っているという信念を含んでいる。つまり、個人の資源と関係の能力の両方にかかる実現傾向を仮定しなければ、第2条件から第6条件は意味を成さないのである。

Rogers (1980) による以下の記述から、ひと (person) という言葉が、自律性と関係性という2つの弁証法的な次元を表していることが分かる。「クライアント中心療法は、健康的な変化と成長を促進するひとと共にいる在り方として継続的に発展している。その中心仮説は、[1.] ひとは自分自身の中に、自分自身を理解し、自身の在り方や行動を建設的に変化させる巨大な資源をもっており、[2.] その資源は、規定可能な特性をもつ関係性の中で、解放され実現することができる Rogers (1980)。」Rogers が一貫して唯一の原理であると主張する実現傾向の根本的な仮説は、これら2つの次元の弁証法的な緊張として見られなければならない (Schmid, 1999; 2001b)。

Rogers (1957) が前提条件として「接触」を語っているこの事実から、関係という概念の中心性が強調される。言い換えれば、接触 (関係) とは、誰かに向かうアプローチの在り方として PCA の根底にある本質なのである。

**接触とは、触れることであり、触れられることである**

Rogers (1957) は、「心理的な接触」を「最低限の関係」と規定しており、接触とは、「それぞれが、他者の経験領域のなかに知覚できるほどの違いをもっている」ことを意味すると定義している。これは、他者から影響を受けることができるということ、少なくともある程度の開放性と気づきの力が必要であることを示している。また、「接触」とは「つながり」であり、「心理的な接触」をもつということは、関係性に入ること、もしくは関係の中に在るということである。言い換えれば、接触とは、触れること

であり触れられることである。誰かに物理的に触れることが、触れられた側だけでなく触れた側にも変化をもたらすように、心理的、感情的、精神的に触れること、触れられることも同様なのである。

**セラピーにおける動きの方向は常に CI から Th へ向かう**

心理療法は意図しない衝突から始まるものではない。CI が Th に話しかけるか、Th が CI との「接触しようとする」かのどちらかから始まる。そして、接触のためには、CI と Th の両方が (CI は少なくとも最低限の程度で) 開かれていなければならない。どちらかが触れられることに開かれていない場合、接触は起こり得ないのだ。

関係や接触が生じるときには、触れることと触れられることの両方が関係しているが、「最初に触れる」のは常に CI である。たとえ Th の主導で接触が起きた場合でも、まず初めに CI をひととして認識したとき、最初に触れられるのはやはり Th なのだ (そうでなければ、それは PCT ではなく、ある種の指示的療法あるいは「ガイドダンス」になる)。CI とのつながりは、CI をひととして認識すること、そして CI に応答することから始まるのである。そこで CI に唯一求められることは、つながりに対する感覚や体験に対する最低限の開放性であり、接触されることによって現象学的な領域の違いを知覚、もしくは「潜在知覚」することである。一方、Th に求められることは、CI をひととして知覚し、自分自身が「ひととして存在する」ことである。このことが中核条件の根本的な本質を示している。

接触とは常に異なる「個人」同士の接触であり、セラピーにおけるすべての理解は Th と CI の共通性と多様性に基づいている。私たちがもっている共通点は、私たちが共感することを可能にし、私たちの間にある違いは、共感の感度を高めるように私たちを刺激する。それによって CI のアイデンティティの自己探求と発展を促

すのである。

#### 接触とは、触れ続けることである

そして、接触するだけでなく接触を維持することが心理療法の課題となる。行き当たりばつたりの接触は、それが起きてもすぐに消えてしまうことが多い。セラピーでは、接触を維持し、関係性を発展させていくことが必要である。つまり、場合によってはCIを「失わない」ために、積極的にその関係を維持していく必要があるということである。

PCTが進む在り方は、可能な限り相互の出会いの関係に開かれることであるが、少なくともあるひとがその場に存在（present）し続ける場合のみ、その接触を維持することが可能である。つまり、プレゼンスは接触の目標であり、プレゼンスこそが中核条件そのものなのである。

#### 知覚とは提供されたものを受け取ること

Rogers (1957) の第6条件は、「Thの共感的理解と無条件の肯定的関心が、最低限CIに伝わっていること」である。このCIがThから「受け取る」ということが知覚である。接触と知覚は本質的につながっており、そこにはセラピー関係を維持するための3つのステップがある。(1) CIは、明在的もしくは暗在的に困っている人として自分自身を動かして「その場に現れる」一常にCI側にある、始めの「動く」ポイントである。(2) その後、ThとCIの最初の出会い（下記参照）から応答としてのThによる中核条件に特徴づけられる関係、つまりプレゼンスの提供がなされる。(3) そして「ThについてのCIの知覚（Rogers, 1957）」が最後のステップである。それは、「CIが最小限にでも、Thが自分に対して経験している受容と共感を知覚している（Rogers, 1957）」ということの意味している。つまり、Thの「プレゼンス」がCIの知覚に変化をもたらすということだ。「関係」と同様に「知覚」もまた、心理療法の中においてThとCIの両側で発展するプロセスであり、

これが「パーソナルな実現」の在り方なのである。

### Ⅲ. プレゼンスとパーソナルな実現

パーソン・センタードな関係性の本質は、客観化でも同一化でもなく、間主観性である

接触した後はどうなるのだろうか？人には、物との関係や他の人との関係など、様々な関係の可能性がある。

[1.] その1つは客観化である。客観化するということは、物や人を自分の反対側において外から見るということである。例えば、伝統的な医学的診断の方法で病気について話したり、その人の仕事や学校の成績について話したり、外の視点からその人の考えや感情について話したりする場合などがこれに当たる。自分のことを考えたり、話したりすることも同様である。これは、Buber (1923) が「我-その関係」と呼ぶものだが、この「我-その関係」を軽視し、「我-汝の関係」だけを価値あるものと評価することは根本的に間違っている。なぜならば、客観化せずに評価したり、判断したり、決断したりすることは誰にもできないのであって、つまり「我-汝の関係」だけで生きていくことはできないからだ。

[2.] 2つ目は同一化である。同一化とは、他者を自分と完全に同一のものとして見て、他者の領域に自分をおき、その人のように感じ、同じように考えることで、自分と他者の距離をなくすことである。そこに対立や相違の瞬間はなく、両者は1つに併合されてしまう。

[3.] 3つ目と上記2つの関係との根本的な違いは、自分自身の本質を無視することなく、他者の本質の中に全体として関わること、つまり、違いを維持するということである。これがパーソナルな関係（例えば、セラピーにおけるパーソン・センタードな関係）であり、つまり主観と主観の関係であり、ひと対ひとの関係である。この伝統的な関係の在り方は、出会い（encounter）と呼ばれている。パーソナルな出会いの関

係では、他者に関する知識の取得ではなく、他者を承認すること（Schmid, 2001c）に重きが置かれる。他者からの承認によって自己の承認を育むのである。

この出会いの関係では、主体と対象の能動-受動関係が、私たちの関係（we-relationship）という間主観の関係へと超越される。間主観の関係の中では、他者は常に出会いの哲学における真の他者であるという信念を持って、完全に異なる個人として尊重される（Schmid, 2001a）。したがって、出会いは常に「向かい合う」ことであり、客観化することとは全く異なるものだ。他者の「向こう側になること（being counter）」（Buber, 1986）は、出会いの前提条件として他者を自律的で尊い人として認識するというひと特有の資質であり、対面し、承認し、共感するための基盤なのである。

#### 承認：他者の実現化としての知覚のパーソナルな在り方

客観化と出会いの質的な違いは知覚の在り方にある。出会いにおいて私たちは表面的な外側ではなく、出会いの本質を知覚する。つまり、現実と出会うということだ。実現化（Realising）とは、そこにある現実気づくことであり、ひとという真の存在を表している。そしてパーソナルな実現化とは、他者を客観化して表面的に観察するのではなく、他者の具体的で、特有で、独自の在り方に開かれることである。パーソナルな実現化において、私たちは自分が見聞きした他者についてだけでなく、他者がどのような存在で、どのようになりうるかを「受け取る（知覚する）」）。これは、他者の実際の現実だけでなく、その可能性を受け取るということだ。パーソナルな知覚とは、つまり承認することであり、それは知ること以上のものであり、実現化のパーソナルな在り方そのものなのである。

そのような知覚の在り方が、他者の成長をサポートする信じられないほどの力を提供していることは明らかである。加えて、自己の実現化

（self-realisation）とは、他者によって実現化され、承認されることを通してのみ可能であるということを表しているのだ。

他者へのパーソナルな知覚が関係性の基礎である場合、そこに倫理的な関係が作り出される。他者は、知覚という方法を洗練させることで理解することができないのである。他者は、共感の感度を高め、他者が明らかにしたことを通して、また他者に触れられていることへの開放性を高めることで理解されなければならない。これがパーソン・センタードなコミュニケーションの在り方を独自のものにし、「非指示的」であることの正当性を表すのである。

#### 最初の出会いとパーソナルな出会い—体験から共同体験・共同応答へ—

ひととの出会いでは、他者の原理的な他者性と未知に対する驚きの瞬間がある。これは、出会いの関係が相互である必要がないことを示している。CIがThと出会うなくても、ThはCIと出会うことはできるのである。Th側でCIと出会うということは関係、つまりCIとThの知覚の違いを作り出す（Rogersによると、もしそれがなく場合もしくはそれがあまるまでは、パーソナリティの発達を目的としたセラピーは不可能である）。しかし、そのような「最初の出会い」は、パーソナルな出会いの関係へと超越され、最終的には相互の出会いの関係を指さなくてはならない。

さらに出会いの現象を調べていくと、出会いの体験と出会いの関係性の違いが見えてくる。用語を明確にするために、「最初の汝との出会い」と内省（reflection）を通してのみ可能になる「パーソナルな出会い」を区別しなければならない。まず初めには、「最初の出会い」があり、それは、客観化する中間段階を経て、パーソナルな出会いへと超越することができるのである。

[1.] 最初の出会いは、よく雷に例えられる。それは単に起きる。通りを歩いていると、突然

何百人もの人の中から1人のひとを目で「捉える」ことのようなものである。セラピーにおいては、これはThがClから受け取る最初の「印象」であり、それは内省以前のものである。

[2.]「最初の出会い」から客観的な立ち位置に「後退」して初めて、相互的な出会いの関係、つまり「パーソナルな出会い」が可能になるということを認識することが重要である。Thが他者に感銘を受け、驚き、疑問を抱くことが必要であると同じように、内省することも同様に重要である（後期のセラピーでは、これはClと一緒にられるかもしれないが、初期の段階では、Thだけの作業となることが多い）。そして、ClがThの透明性を通してこのことを見ることができればできるほど、Clはより促進されるのである。また、内省の瞬間はスーパーヴィジョンの中だけでなく、セラピー関係そのものの中でも行われる。影響を受けることと内省することを同時にすることはできないが、お互いの後すぐに起きるのである。その瞬間に体験したことは、内省され、その内省の結果は、新たな影響を与える体験につながるようになる。そして、それはますます共同体験、共同内省になっていき、ひととしての関係を共同創造するのである。私が出会うのは「あなた」であり、その後私が考えるのが「その人」である—それは、この体験を打ち負かすためではなく、体験を統合し、さらなる関係を促進するためである（したがって、現在の瞬間の中に留まる出会いの関係のプロセスの中で「あなた」は決して「それ」になることはない）—。

このプロセスの調和において、私の体験と他者の体験との間には「共同応答」が求められる。「共同応答」は、一方では、私自身を他者の体験に同調させ、他方では他者から私の体験を「分離」させ、他者の体験の知覚から私の知覚を「分離」させる。これが実現化のプロセスであり、体験と現実を確認するプロセスである。そしてこれこそが、一致とは、純粋性とは何かということを表している（Schmid, 2001a）。

[3.] この内省の「段階」の後に、新しい出会いが可能になる。他者は新たな汝となり、このパーソナルな出会いが、それを意図的に創造する関係の可能性を開いていくのである。これこそが「関係の出会いとしてのセラピー（Rogers, 1962）」としてRogersが明確に記述したものだ。出会いにより、ClとThの両方が、セラピーをCl自身で自分の未来を「創造する」ことができるようにClの当事者性を強化する関係を共創するものとして理解することができる。しかし、それは内省の後でのみ可能なのである。

### 心理療法は相互の出会いを目指す

PCTにおける「セラピーでの出会い」は、たとえそれが非対称的であったとしても、相互的、あるいは少なくとも相互性に関わったものである。最初のうちは、Thにとっての出会いがClにとってまだ相互的なものではないという意味で、パーソナルな出会いを提供するのはThだけかもしれない。しかし、セラピープロセスの目標は、やはり十分な、つまり相互的で対称的であるパーソナルな出会いなのだ。その中では、対面するお互いのひとが、自由に、そして自身の責任を自覚した上で、一方でその人自身になり、他方でお互いが本質的に違うものとして他者を承認する。つまり、お互いにひととして存在しているということだ。

PCTは、他者性や多様性を尊敬し、尊重することで私たちの間の違いを埋めようとしている。そして、出会いの関係はそれに適している。PCTは、多かれ少なかれ（であってもほぼ完全に）相互性と開放性が損なわれている時点から始まる、十分な相互性に向かって努力する出会いの関係である。それは、促進的な風土の中で、体験に関わられることで促進される本物であること（Authenticity）、承認（Acknowledgment）、理解（Comprehension）によって育まれる。このひとの在り方、そして相互的でパーソナルな出会いに向かい関係が発展することの根底にあるものがプレゼンスと呼ばれているのである。

### プレゼンス；セラピー関係の共創

「プレゼンス」は、Thとしての存在様式と行動様式の相互関連性における「中核条件」の基本項である。「中核3条件」を詳しく見てみると、それらが、「プレゼンス」の現象学的な記述であることが分かるだろう。「中核条件」は、(1) 出会いの關係に發展することができる不一致なCIとThの間に最低限の接触があり、(2) Thがこの關係を提供していることにCIが気づいており、CI自身がまだ實現されていない資源から發展する可能性を認識しているときに動きはじめる。つまり、本物であること、無条件の承認、理解という基本的な態度は、出会いの条件として理解することができるのだ。

[1.] ある瞬間への開放性において、プレゼンスは本物であることを育む。本物であること(Schmid, 2001a)とは、ひと(CIだけでなくThも)が自分と他者との關係の中で純粋な当事者として認められ、信賴されていることを意味する。つまり、本物であることは対話に入るための前提条件であり、パーソナルで促進的なコミュニケーションの基礎なのである。

[2.] 他者の存在に自分自身をさらけ出すということは、他者の現実に実存的に触れられることに開かれていることであり、また他者の現実に触れることである。そして、理解(Schmid, 2001b)とは、興味深く挑戦的な部分は未知で未解明のものであるという「知らないということ art of not knowing」としての心理療法を表している。共感的であるということは、ひととひとの間の違いの隙間を取り除くことなく、またそれらを無視することなく埋めるということだ。予期せぬことを待つということにおいて、共感PCTの基盤なのである。

[3.] 他者が真に他者であることを慎重に尊重し、同時に基本的な「私たち」の共通性に気づく中で、プレゼンスは承認を促進する。無条件の承認(Schmid, 2001c)とは、1人のひととしての他者に向かって、意思を持って積極的に「yes」という態度である。それは、その人が自

分自身の価値や尊厳において、真に認められ、「尊い」存在として尊重されるということの意味している。それは、他者についての知識ではなく、ひととしての双方向の承認へ向かっていく。常に「最初にくる」他者の存在は、私が逃げるのでできない応答の呼びかけである。なぜならば、私の代わりに応えられる人は誰もいないからだ。私たちには応答可能性があり、他者に対して義務と責任があるため、その人に応えなければならない。そして、その応答から、その状況では誰も私の代わりに応答することができないという事実に基づいた応答可能性が生まれる。つまり、出会いの倫理的側面が示されているのである。

要約すると、「プレゼンス」とは、人生の現在その瞬間に自信を持って参加するということだ。それは關係の中でその瞬間に起こったことから共同で学び、それに応答し、共同でプレゼンスを体験し、共同で未来を創造することを意味している。プレゼンスは、カイロティックな特質なのである。

### 即時性はカイロスの潜在的な長所を活かす

出会いの關係性、つまりPCTの本質的な特徴は、先入観的な意図や方法を放棄することだ。そのためにはまず、すべての技巧や方法、ふと出くわしたり出会ったりすることを妨害するすべての意図を捨てることが重要である。なぜならば、出会いとはあらゆる方法を越えたところにある、關係における体験の即時的関与だからである。プレゼンスとは、ひと対ひとの出会いであり、間に何もない共同体験である。だからこそ、それはとても挑戦的で、恐ろしくもあり、豊かなものでもある。用いられる唯一の「意図」や「手段」は、そのひと自分自身だけなのだ。もし「専門性 Expertism」というものを表現できるとすれば、それは、伝統的な専門家のように振舞おうとする誘惑に抵抗する能力にこそあるのである。Rogersの言葉を借れば、「CIが専門家である」ということだ。Thの仕事は、



体験を「作る」のではなく、CIと共同体験をすることなのである。

出会いの哲学における実存的で即時的なプレゼンス、つまり一体感につながるパーソナルな在り方とは、その人のプレゼンスによってパーソン・センタードな関係を提供するひとが、自身のパートナーに対して、豊かな瞬間に集中する希望、つまり、自分自身とその人との関係に開かれることを意味している。

### 3. 考察

#### (1) Schmidのプレゼンス論

出会いの関係にまつわるSchmidの論考は、従来の中核条件やプレゼンスの論をRogersに忠実でありながらも対話的アプローチの立場からより発展させている点が独自のである。従来のプレゼンスは、Rogers(1986/2001)が「明らかに超越的で、記述不能な霊的なものを含んでいる」と述べているように、論理的な説明ができないという意味でスピリチュアルだと捉えられることもあった。しかし、Schmidはプレゼンスの在り方を接触と知覚、そして関係における中核3条件と他者性の関連から論理的に記述しており、説明可能性という点において、これまでのプレゼンス論とは一線を画している。

Schmidにとって、プレゼンスとは中核3条件の根本的な本質であり、現在その瞬間において他者を「ひと」として知覚し、また自分自身も「ひと」として存在することを意味しているのである。他者を「ひと」として知覚するとは、自分の目の前にいる人を独自の、不可解で、しかし尊い唯一の存在としてその人の本質を無条件に承認することである。そして、「ひと」として存在するとは、他者に向かい合う存在として、他者からの影響を受けながらも自身の本質を維持してその場に居続けることであり、本物であることである。さらに、その人に積極的な関心をもちながらも、その人の本当に大切な部分は未だ分からないのだという理解の在り方は、

自分と全く異なる存在としての他者との間の架け橋になる。これら中核3条件の態度が三位一体となってプレゼンスを表現するのである。

また、CIとの出会いにおいて、プレゼンスはThの応答である。このことは、Mearns(1994/2000)の「PCAの真髄はなすこと(doing)ではなく在ること(being)」という言葉とも関連が深い。言うなれば、出会いの哲学における真なる他者であるCIに向かうには、Thは自身のプレゼンスでもって応答するよりほかないのだ。他者に何かをなそうとするのではなく、他者と「共にいる」そして「相対する」という在り方が、出会いにおける接触(関係)を維持することにつながる。そして、そのようなThの在り方がCIに知覚されることで、セラピーは相互的な方向へ発展していくのである。

#### (2) 他者との関係における内省

「我-それ関係」を軽視すべきではないと考えているSchmidは、内省を出会いのプロセスにおける客観化の段階として位置づける一方で、「出会いの関係のプロセスの中で「あなた」は決して「それ」になることはない」とも主張している。この記述を補足するとすれば、内省するときは「我-その関係」であるが、他者と出会うという瞬間においては、あくまで「我-汝の関係」であり続けるということを示しているのだろう。つまり、「我-汝の関係」と「我-その関係」がお互いに推移し、その相互性によってそれぞれの関係の在り方が促進される様式を示していると解釈できる。しかし、それはまさにBuberのいう「我-その関係」の在り方であり、「出会いの関係のプロセスの中で「あなた」は決して「それ」になることはない」という記述とは矛盾するように感じる。SchmidがBuberに影響を受けていることは明白であるが、この箇所を取ってBuberを意識せず客観化に焦点を当てて解釈するとすれば、以下のような記述になるだろう。すなわち、他者との出会いの中で、自分の体験を客観化して考えることは、

その体験を統合し関係を促進するために重要である。ただし、他者と出会うその瞬間においては、客観化した自分の体験を通してではなく、ありのままの他者の存在を受け取る必要がある、ということである。

### (3) プレゼンスとしての「私」とは何者なのか

本論でSchmidは、出会いの本質的な特徴は、先入観的な意図や方法を放棄することであり、唯一の「意図」や「手段」は自分自身であると主張する。これは、Thが自己をCl-Th関係に積極的に投入するというMearns & Thorne (1988/2000)の考え方と近いものだ。ひと対ひとの出会いとは、方法論を超えたその瞬間の体験に対する関与であり、そこで用いられるのはプレゼンスとしての私だけなのである。しかし、その時の「私」とは、つまりプレゼンスとしてそこに存在する「私」とは、一体何者なのだろうか。Mearns (1994/2000)は、十分に研修を積んでいないカウンセラーは、自分自身を利用するような取り組みをすべきではないと述べている。出会いにおける体験や内省の様式はTh一人ひとり異なるはずだということを考えると、Mearnsの主張からPCAのThには自己の在り方そのものが問われていると読むことができる。しかし、SchmidもMearnsも、「私」がそこにどう在るかについて述べるに留まり、「私」という存在が如何なるものかについては言及していない。

構成主義の立場では、人間とは自らを秩序づけながら、自己組織的に発達する存在とされる(菅村, 2004)。自己とは、絶えず流動的で、これまでの経験と現在の環境が複雑に絡み合い、あらゆる相互作用を経ながら組織化していく過程なのである。

プレゼンスとしての「私」が流動的であると考えると、出会いの関係における自己も新たに捉え直されるかもしれない。つまり、出会いの中でClに影響を受けることで、Thの自己の枠組み自体が変わっていくのである。そのように

考えると、意図や方法は放棄すべきものではなく、もはや自己の一部であり、流動的に変わっていく「私」の一部となる。流動的な自己としての「私」という存在が、即時の体験の関与において他者とどのように関わり、プレゼンスとしてどのように在るのか、今後さらなる検討の余地が残されているだろう。

### 文 献

- Buber, M. (1923). *Ich und Du*, Heidelberg: Lambert Schneider, 8th ed. 1974; orig. 1923.
- Buber, M. (1986). *Begegnung: Autobiographische Fragmente*, Heidelberg: Lambert Schneider.
- Mearns, D. & Thorne, B. (1988). *Person-Centred Counselling in Action*, Sage Publications of London. (伊藤義美(訳)(2000)パーソンセンタード・カウンセリング, ナカニシヤ出版.)
- Mearns, D. (1994). *Developing Person-Centred Counselling*, Sage Publications of London. (諸富祥彦(監訳)(2000)パーソンセンタード・カウンセリングの実際—ロジャーズのアプローチの新たな展開—, コスモス・ライブラリー.)
- 並木崇浩・白崎愛里・山根倫也・小野真由子(2021)人が「ひと」として本物であること—Schmidの論文から学ぶI—, 関西大学心理臨床センター紀要(印刷中).
- 岡村達也・保坂亨(2004)プレゼンス(いま—ここに—いること)—治療者の「もう一つの態度条件」をめぐって—, 村瀬孝雄・村瀬嘉代子(編), ロジャーズ—クライアント中心療法の現在—, 日本評論社, 70-92.
- 小野真由子・斧原藍・並木崇浩・山根倫也・白崎愛里(2021)「出会い」の哲学から再考するパーソン・センタード・アプローチの共感的理解—Schmidの論文から学ぶII—, 関西大学心理臨床センター紀要(印刷中).
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality

- change, *Journal of Consulting Psychology*, 21 (2), 95-103.
- Rogers, C. R. (1962). Some learnings from a study of psychotherapy with schizophrenics. In Rogers, C. R. & Stevens, B. (Eds.), *Person to person: The problem of being human*, 181-192, Moab: Real People Press.
- Rogers, C. R. (1980). Client-centered psychotherapy. In Kaplan, H. I., Freedman, A.M. & Saddock, B. J. (Eds.), *Comprehensive Textbook of Psychiatry III. Volume 2*, 2153-2168, Baltimore, MD: Williams & Wilkins.
- Rogers, C. R. (1986). A Client-centered / Person-centered Approach to Therapy. In Kutash, I. & Wolf, A. (Eds.), *Psychotherapist's Casebook*, Jossey-Bass, 197-208. (伊東博・村山正治 (監訳) H.カーシェンバウム / V. L. ヘンダーソン (編) (2001) ロジャーズ選集 (上) —カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文—, 誠信書房.)
- Sanders, P. (2004). History of CCT and the PCA: events, dates and ideas. In P.Sanders (Ed.), *The Tribes of the Person-centred Nation*, Ross-on-Wye, PCC Books. (三國牧子 (訳) (2007) パーソンセンタード・アプローチの最前線—PCA 諸派がめざすもの—, コスモス・ライブラリー, 1-22.)
- Schmid, P. F. (1999). Personzentrierte Psychotherapie. In Sonneck, G. & Sluneko, T. (Eds.), *Einführung in die Psychotherapie*. 168-211, Stuttgart: UTB für Wissenschaft - Facultas.
- Schmid, P. F. (2001a). Authenticity: The person as his or her own author. Dialogical and ethical perspectives on therapy as an encounter relationship. And Beyond. In Wyatt, G. (Ed.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 1: Congruence*, 213-228, Ross-on-Wye, PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2001b). Comprehension: The art of not-knowing. Dialogical and ethical perspectives on empathy as dialogue in personal and person-centred relationships. In Haugh, S. and Merry, T. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 2: Empathy*, 53-71, Ross-on-Wye, PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2001c). Acknowledgement: the art of responding. Dialogical and ethical perspectives on the challenge of unconditional personal relationships in therapy and beyond. In Bozarth, J. and Wilkins, P. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 3: Unconditional Positive Regard*, 49-64, Ross-on-Wye, PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2002). Presence: Im-media-te co-experiencing and co-responding. Phenomenological, dialogical and ethical perspectives on contact and perception in person-centred therapy and beyond. In Wyatt, G. and Sanders, P. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 4: Contact and Perception*, 182-203, Ross-on-Wye, PCCS Books.
- 白崎愛里・並木崇浩・山根倫也・小野真由子 (2021) 対話・他者との「出会い」の哲学から考える無条件の肯定的関心—Schmid の論文から学ぶ III—, 関西大学心理臨床センター紀要 (印刷中).
- 菅村玄二 (2004) 臨床心理学における構成主義とは何か? : 基本主題をめぐって, 臨床心理学, 4 (2), 49-54.
- Thorne, B. (1992). *Carl Rogers*, Sage Publications of London. (諸富祥彦 (監訳) (2003) カール・ロジャーズ, コスモス・ライブラリー.)
- Thorne, B. (1994). Developing a spiritual discipline. In D. Mearns (Ed.), *Developing Person-Centred Counselling*, Sage Publications

of London (諸富祥彦 (監訳) (2000) パーソン  
センタード・カウニングの実際—ロジャ  
ーズのアプローチの新たな展開—, コスモス・  
ライブラリー, 71-76.)

## 付記

Carl Rogers 博士に師事し、PCT における対話的  
アプローチの創始者であった Peter Schmid 博士は  
2020 年 9 月 15 日に逝去されました。本稿を含む今  
回の論文 (並木ら, 2021; 小野ら, 2021; 白崎ら,  
2021) は、Schmid 博士の緻密な論考が日本でも広  
く認知されることに僅かでも寄与することを願い執  
筆したものです。私たちに多大な遺産を残してくれ  
た Schmid 博士への尊敬と感謝にかえて、本稿の結  
語とさせていただきます。Schmid 博士の安らかな  
眠りをお祈りいたします。